

## 毘梨耶波羅蜜 (精進)

### 精進

引き続き六波羅蜜のお話をしてまいりまして、今までに

布施

持戒

忍辱

と進んで来ましたが、つぎの第四が、毘梨耶波羅蜜であります。

毘梨耶波羅蜜のビリヤという語は、これを精進と訳します。よく精進努力と続けて言われますが、つとめはげむことでもあります。仏道を修めるにはもちろんのこと、日常の生活にもなくてはならぬ徳であります。

人生は精進である。精進する人は必ず進み、精進する国民は必ず栄える。若しこれを欠けば、如何なる天才といえども平凡無価値なる石ころの如き人生をおくり、凡人といえども精進する者は必ず、非凡なる域に達することが出来ます。

天地の道理は、決して棚からボタ餅式には、人格の光も、尊き生活も、真実の喜びも与えはしない。よく精進努力する者へのみ、その汗を通し努力を通して、尊きものを与える。であるから我等は唯精進すべきであります。

おこたらず

精進とは如何なる意味でありましょうか。大智度論には

「一切善法中に於いて、勤修して懈らざるを、是れを精進の相と名く。」と言ひ、又「懈怠の黒雲は、諸の明慧をおおいて、功德を呑滅し、不善を増長す。」

と言つてあります。小人閑居して不善をなす、なまけ者は、智慧を失ひ、功德を滅して、不善をする。誠むべきであります。又曰く

「懈怠の人は、初小楽ありといえども後に則ち大苦あり、譬えば毒食は初め香味なりといえども久しくして則ち人を殺すが如し。」と

なまけ者は小楽を求めて、遂に大苦に到るのであります。毒なものほど食つて見たく、しかもやがて毒になれて死に至る。懈怠は死に至る道であります。又曰く

「懈怠の心は、諸の功德を焼く、譬えば大火の諸の林野を焼くが如し、懈怠の人は、諸の功德を失う、譬えば賊に被れて、また遺余なきが如し。」

懈怠は、大火である。賊である。一切の功德を焼き失わしめる、誠に厳しいお誡めであります。精進なき生涯は恐るべき哉であります。であるから大智度論には、

「一切、今世後世の道徳利益精進によつて得るなり。また次に若し人自ら身を度せんと欲すれば、尚まきに勲急精進すべし。何に況や菩薩の誓願、一切を度せんと欲するにおいてをや。」

と説いていられます。世間の問題と言わず後世の問題と言わず、一切の利益は唯、精進からのみ生まれます。懈怠を出でて精進することは人間必須の大道であります。自分一人の問題、尚然り、況や一切を済度せんとする菩薩の道に精進なくしてすむでありませんか。

志かたし

更に精進とは如何なる相のことでありましようか。龍樹は、これに答えて、「問うて曰く、云何が精進の相と名く。答えて曰く、事に於いて必ず能く起発して難きことなく、志意堅強にして、心疲倦なく、所作究竟す。是の如き等を名づけて精進の相となす。復次に仏所説の如し。精進の相は、身心息まざるが故なり。」と言われます。事に当たって苦難を苦難とせず、七転八起、屈せず、たゆまず、金剛の意志に立って、動かずたじろがず、唯精進努力して、断じて退かない。「身心不息」身も心も打ちこんで息まない。誠に継続は力である。そこには決して、倦み疲れはあり得ない。

精進とは実に、唯単に懈怠でないという消極的な方面のみならず。その半面はかかる、大積極の忍苦精進努力の永続持続進達の一道をたどることでもあります。

精進の精は、粗の反対で、粗は粗末、粗品、粗相等、感心の出来ない文字であります。精は粗末ならず、粗相ならず、慎重、精密、精細、純粹、心を一所一物に打ち込んだ尊重すべき世界を表す文字であります。

精進の進は、進歩、進達、進展、進取、等の進で、永久に一処にとどまらないで、進み進んでやまぬことでもあります。

心を一処一物に専注して、志金剛の如く、進んでやまぬ時、一切のことが成就するのであります。でありますから、布施も、持戒も、忍辱も、禪定も、若しこの進んでやまぬ、創造不退の生命がないならば、それは全て死灰物であつて何等の意味を持たなくなります。

一切の繫縛の繩と智慧劍をもつて切り、一切の苦悩を一身に荷負し、与えられた一道を、進んでやまぬ処に大信の天地があるのであります。私は又しても、法蔵菩薩の

「仮令身止 たとい身を

諸苦毒中 諸の苦毒の中におくとも

我行精進 我行は精進にして

忍終不悔 忍んで終に悔いざらん

の誓願を憶念します。木が太らなくなれば枯死します。人進まなければ退きます。天も創造し、地も進展する。古往今来、精進の二文字をぬきにしては、一切の聖賢も、偉人も、天才も、道も、徳も事業も、科学も、一切がっさい生まれては来ないのであります。

人生の意義は、かかつて精進の二文字にあります。「一切、今世後世の道徳、利益は、皆精進によつて得るなり。」との龍樹の断言は至言といふべきであります。

### 三種精進

成唯識論の中には、三種の精進が説かれてあります。

被甲精進

摂善法精進

利樂精進

以上の中、第一の被甲精進とは、兵が甲冑を被つて弾丸しせき矢石の間を突撃するが如く、何ものもおおそれず、屈せず、精進努力してやまぬことであります。

これは甚だ大切なことであつて若しこの積極的な大精神力がなかつたならば、何事も成就しない。一道をとつてたじろがず。中途で止まず、屈せず、にぶらず、まがらず、遂に、精進の一道を進みきる所に、菩薩の行は成就されるのであります。世の薄志弱行の徒は悉く、この大勇猛精進を不斷に持続することを忘れて、功を九仞じんの一簣きに欠いだり（註：ほとんど成功しかけたことを、今ひといきのところ、失敗する）、最後の五分の苦闘を忘れて有終の善をなすことが出来なかつたりするのであります。

古から仏道を求めた人たちは「仮令、大千世界に満てらん火をもすぎゆきて、」仏の教えを聞き、法を求めるほどの決心で、歩みきりましたが故に、大徳の域に達したのであります。何時の世でも我等が天の法則、地の道理に乗つて生きる限り、必ず要求されることでもあります。

### 撰善法精進

つぎは撰善法精進であります。これ亦必要なることであります。悪人愚者、世を害するようなものといえども動き働いています。人一倍精進しているかも知れませんが、しかしそれが精進と言われたいのは、善法による一切善徳を成就しようとするこ

とによつてなされていなければなりません。だから、貪欲のために使われて如何に勤儉力行、あした旦から夕まで努力しようと精進ではあります。悪心から悪事を計画して、どんなに身心を勞しようとも精進ではありません。そんな悪事は、誰が考えても精進とは言われませんが、しかし悪事のみならず、………龍樹菩薩に従えば、これまでに説かれた布施、持戒、忍辱等々の善でも必ずしも善とは言われたいのであります。金持ちは何等の努力もいらず、売名のため、あるいは強いられたために布施することも出来る。あるいは、形の上から見れば、忍んでいても、若し忍んでいなければ、ひどい制裁を受けねばならないとか、あ

とが恐いとか、畏怖のために忍んだのでは精進とは言われたいのであります。そこで、一切の善の底には、どうしても精進が説かれねばならないのであります。

精進の精進たる所以は、そのなされる衷心が、真実であることであります。真実に根ざさない以上如何なる善も善ではあり得ない。衷心に、正しい、温かい、至誠真実の血が動いておれば、必ずその人の一切が生きて来ます。外部へ、一時へつらつて、形を合わせた腹に一物あつてやつたり、弱くて嫌々ながら善の形をとつたり、こうした、衷心の真実を欠いていたのでは、そのこと自身が精進ではありません。

そこで、撰善法精進が求められるわけです。み法を求めることは、我等の行即ち生活が、正しくあるためであります。正しい真理を求めることは、真理の如く生きようとすることであります。そこで正法を求めることが、正しい精進を生みます。正法を求めること自身が精進であります。

大無量寿経に、法蔵菩薩は、

「たとい仏ありて、百千万億、無量の大聖、数恒沙の如くならんに、一切これらの諸仏を供養せんより、道を求めて、堅正にしてしりぞかざらんには如かじ。」

と叫んでいられますし、師仏世自在王如来は、

「人、至心に精進して道を求めて止まざることあらば、会かならず当こっかに剋果すべし。何の願が得ざらん。」と教えられています。正法を求め、道を求めて精進することがなかつたならば、何事も成就しないのであります。

大智度論に、龍樹は、

「一切諸の善法乃至、阿耨多羅三藐三菩提あのおくたらさんみやくさんぼだい、皆精進不放逸より生ず、復つぎに精進は、能く先世の福德を動発すること、雨の種をうるおして能く必ず生ぜしむるが如し。此も亦是の如し。先世の福德因縁ありといえども若し精進なければ、則ち生ずること能わず、乃至、今世の利なお得る能わずいかにいわんや仏道をや。」と。

誠に尊いみ教えであります。玉磨かざれば光なし、如何に福德がその人の中に潜在しているようと、一度精進を通さずば、断じて芽を切り枝を茂らせ、花を咲かせてくれません。

愚かなる哉、人、精進を忘れて、功を一鍬におこそうとして天地の理にそむいて、自ら墓穴を掘る。一も精進、二も精進、遂に精進なる哉。

### 利樂精進

第三は、利樂精進りぎょう、即ち一切衆生を利益するための精進であります。仏教の根本原則の一つは、必ず、自利利他の精進でなければならぬことであります。如何に今、徹底せる自利一点張りの精進であろうとも、究竟的な世界においてはその自利が、そのまま利他でなくてはならない。利他完成がそのまま自利でなくてはならない。

若し、自己を生存して行くことが、一切衆生を損なうことであるならば、それは決して、真に自己を成就しているのではない。それは自らを損なっているのである。自損は永久に損他であり、損他は遂に自損であります。真に自己を完成することは、必ず、一切衆生を完成することである。この自利、利他一如の大道こそ、菩薩の精進であります。ですから精進の根底は徹頭徹尾、利他でなくてはなりません。

この利他なき精進は決して精進ではない。如何に二六時中、頭燃をはらうが如く動きまわっていても、それが貪欲、瞋恚、愚痴、私利、私欲、名利、権勢等々のための活動であるならば、断じて精進ではない。ここに我等、深い内省と、人生生活の本質を教えられますのであります。

以上三種精進……正しい真実心が根底となり、法を求め、道を求めて退かず、自利利他一如の願いをもって、金剛不壊の勇猛心によって、精進は成就されるのであります。

### 二種精進

つぎに龍樹は、二種精進を説いています。心精進と、身精進しんであります。精神的精進と、肉体的精進であります。

世には、人間生活をあまりに物的に考えて、肉体労働のみを精進と考えている人がある。しかし、人生は頭の作はたらきが成就するのでもあります。頭の作はたらきを持つことが、人間の特権であります。しかし又、心ばかり働かして、身の精進を軽んずること

も愚かであります。精神活動が、肉体を動かします。人間の体の動きが人生生活であるとも考えられます。この二つは決して、いづれを軽んずることも出来ません。その一方を軽んずる社会は正しい社会ではあり得ません。精神的にも精進が必要であり、肉体的にも精進が必要である。両者相伴って、人生は成就するのであります。かくて、霊肉にわたっての正しい精進の相こそ、救われたる者の相であります。